
英国メイドの世界

久我真樹 [著]

はじめに
004

Ⅰ
英国使用人の世界
007

Column1. 様々な使用人の分類方法
051

Ⅱ
使用人の人生設計
053

Column2. 現代と比較した社会保障
085

Ⅲ
家政系メイド
087

ハウスマイド……088
パーラーメイド……116
ナースメイド……130
ランドリーメイド……164

Column3. 使用人の恋愛事情
193

Ⅳ
料理系メイド
195

スカラリーメイド……196
キッチンメイド……218
コック……236
デイリーメイド……264
スティールルームメイド……282

Column4. 家族との別離と再会
299

Ⅴ
男性使用人
301

ボーイ……302
フットマン……318
ゲームキーパー……352
コーチマン・グルーム……392
ガーデナー……424

Column5. 鳴り響くベル
459

Ⅵ
上級使用人
461

侍女……462
ヴァレット……496
ハウスキーパー……520
執事……552

Column6. 同僚との人間関係
595

Ⅶ
使用人の暮らし
597

オススメ文献
618

Afterward～おわりに
628

参考文献
636

◆◆◆はじめに◆◆◆

現代日本で「メイド」の名は随分と知られるようになりました。かわいらしい制服を着た女性が働くメイド喫茶を中心にマスメディアに露出して幅広い層に伝わり、さらにメイドは小説、コミックス、アニメ、テレビドラマなど創作においても登場する機会が増えています。「可愛らしさ」「献身・奉仕」「お金持ちの象徴」「家事の達人」など様々なイメージを帯びるメイドは、英国ヴィクトリア朝（1837-1901）に発展を遂げた職業でした。実在したメイドは「家事使用人」と呼ばれ、ヴィクトリア朝の頃には女性だけで130万人近くが働き、長く英国女性最大の職業集団であり続けました。

メイドの雇用は中流階級に広く受け入れられて日常を彩り、対照的に日本でもその名を知られる執事の雇用は貴族や裕福な人々の屋敷に限られました。

英国では今も使用人への関心が高く、研究書の出版も続いています。特徴的なのは、実際に勤めた人々による手記や談話などの多さです。たとえば、上流階級の家庭で働く使用人を描いたテレビドラマ『Upstairs Downstairs』は、1970年代に放映された当時、その大きな反響が、研究の呼び水のひとつとなりました。

さらに、かつて使用人として勤めた人々は「ドラマはステレオタイプ」、「使用人の一部しか描いていない」と、実際の姿を伝えるために研究者のインタビューに応じたり、手記を刊行したりしました。19世紀末、あるいは20世紀前半に生まれた彼らは、「最盛期から衰退していく時代の使用人」を経験した生き証人でした。

実在した使用人であるメイドや執事の声が記された資料を読むと、その姿が鮮明になります。メイドや執事は代々主人一家に仕えるものと私は思い込んでいましたが、実際には自分の意思で職場を去り、転職を繰り返しました。求人広告へ応募して就職し、仕事を覚え、スキルを磨き、専門性を高めるキャリア形成や、給与が良い職場を求めての転職は、ヴィクトリア朝には既に行われていました。

大勢のスタッフがいる裕福な屋敷では分業が進み、組織化がなされました。主人から直接指示を受ける上級使用人と呼ばれる管理職は、部下を率いて屋敷を運営しました。組織の中で働く使用人の間では上司や同僚との衝突もあり、人間関係の悩みがありました。

私もまた働かなければ生きていけない境遇のひとりとして、彼らの手記を読んで、使用人に対して同僚や友人のような共感を覚えました。

ある時、ミステリの女王アガサ・クリスティーが使用人について語った言葉と出会いま

た。彼女の作品『名探偵ポワロ』シリーズを通じて英国貴族や屋敷の生活と、そこで働く使用人に興味を持った私には、運命的な言葉でした。

『骨の折れる職務にもかかわらず、使用人たちは前向きで幸せだったとわたしは思う、というのはみんな自分たちのことを専門の仕事をする専門家として評価されていることをよく知っていたからである。（中略）かりに今わたしが子供だったなら、いちばん淋しく思うのは使用人がいないことだと思う。子供にとって彼らは日々の生活の中でもっともはつらつとした部分なのだ。ばあやはきまり文句を教えてくれ、使用人たちはドラマや慰みを提供してくれるし、特別なことではないが興味あるいろいろな知識も提供してくれる。彼らは奴隷どころか、しばしば専制君主となる。よくいわれているように、彼らは“自分の立場を心得ている”が、立場を心得ているということは決して卑屈ということではなくて、専門家としての誇りを持っているということなのだ』¹

使用人は必ずしも恵まれた労働条件で働いたわけではなく、将来に不安もありましたが、時に愚痴をこぼしながらも、一生懸命に生きました。そして、クリスティーが物語るように、専門家として認められ、己の仕事に誇りを持った人々もいました。

本書は、彼ら英国に実在した使用人の幅広い職種や仕事の内容、そして働き方を軸にした解説と、なぜ職業としての使用人が19世紀に社会全体に広く受け入れられたのか、一連の流れを解説するため、次のふたつの構成をなしています。

1 使用人の実態

第1章「英国使用人の世界」では、雇用が広がっていく経緯と、ヴィクトリア朝に成立した厳しい上下関係がある職場環境を扱います。第2章の「使用人の人生設計」では就職事情を、第7章の「使用人の暮らし」では衣食住や日々の過ごし方を描きます。

2 使用人の仕事と、彼らが見た暮らし

多くの種類が存在した家事使用人の仕事および、使用人が見た屋敷の生活を描き出すのが、第3章「家政系メイド」、第4章「料理系メイド」、第5章「男性使用人」、第6章「上級使用人」です。職種独自の仕事や働き方や責任の相違、将来進めるキャリアを解説します。



本書『英国メイドの世界』が、メイドや執事に興味をお持ちの方にとっての総合的なガイドブックとして、あるいは英文学、『シャーロック・ホームズ』シリーズ、クリスティー作品、英国の時代映画などの様々な作品を、「使用人や屋敷を意識した視点」で照らし出すものとして、より興味を深めるための一助となることを願っています。

そして、かつて英国に存在した日々の暮らしの風景や職業事情、主人と使用人の人間関係など、歴史の表舞台に出にくい「英国使用人の世界」に、読者の皆様が関心を持つきっかけとなれば幸いです。

* 本書で扱う「英国」は、主に19世紀の英国国勢調査におけるイングランド、ウェールズ、スコットランドを中心にしたものです。北アイルランドは固有の使用人事情があり、本書では対象外としています。

また、本書はヴィクトリア朝を中心に第二次世界大戦直前までの使用人事情を対象としています。本書に記載された仕事は幅広く共通する事項を取り上げていますが、年代や職場環境によって相違があります。



I

英国使用人
の
世界

使用人の誕生

英国には今も数多く、貴族が住んだ屋敷「カントリー・ハウス」が存在します。緑鮮やかな庭園や色彩豊かな花壇に囲まれた美しい邸宅には多くの観光客が足を運び、往時の風景を楽しんでいます。

美術館のように、貴重な絵画や美術品で飾られた屋敷の中を歩いてみると、ダイニングルームや応接間、寝室といった華やかな装飾であふれる室内の壮麗さが際立ちます。昔日の栄華を留める屋敷には、かつて多くの貴族が暮らしていました。貴族はここで生まれ、育ち、学び、食べ、眠り、遊び、日々を過ごしました。



1… 英国の屋敷外観。Curzon家のKedleston Hall。1

大勢のスタッフによって維持された貴族の贅沢な日常は、100年以上前のヴィクトリア朝に最盛期を迎えました。その後、時代の流れの中、屋敷に住んだ貴族の多数はかつての水準を維持できずに屋敷を去り、執事やメイドといった社交イベントを裏方で運営したスタッフも姿を消しました。

英国に実在したメイドや執事は家事使用人 (domestic servant) と呼ばれ、

雇用主の家庭を職場とした職業でした。雇用主の屋敷に住み込み、掃除や炊事や洗濯といった日々の家事から、ゲストを招いたパーティの準備や給仕の応対、馬車での出迎え、そしてそうした使用人全体のマネジメントまで幅広い業務を行いました。「家事使用人」を本書では以降、「使用人」と表記します)

使用人の特徴

大勢のスタッフを雇用した屋敷では、使用人は軍隊組織のように担当領域ごとに分けられ、役割を細かく決められました。規模の違いや家ごとの小さな差はありますが、本書で主として解説する屋敷の標準的な使用人の組織図 (P.10-11) を挙げてみました。

多様な職種と担当領域



2… 屋敷に住み込んで働いた、大勢の使用人たち。2

使用人は様々な専門性を持った職種から構成されていました。雇い入れる人数は雇用主の経済力に左右され、裕福な雇用主ほど大勢のスタッフや幅広い職種を雇い入れて、提供されるサービスを楽しみました。

使用人に任せた仕事は家事にまつわる「掃除」「洗濯」「育児」「料理」から、社交界が華やかだった時代を反映した「もてなし (給仕・身辺の世話)」、

移動に関わる「馬・馬車の管理」や、広大な領地を持つ人々の贅沢として「庭園」「獵場」を管理する仕事までが代表的なものでした。

担当領域ごとの仕事の違いは大きく、各業務はさらに分業されて効率を高めました。大勢の使用人が別々の部署で協力しあって働く姿は、精密な時計仕掛けになぞらえられるほどでした。

それほど裕福ではない多くの中流階級の家庭でも最低ひとり使用人を雇い入れ、家事を中心に行わせました。領地を持たず、社交の機会にも乏しい人々には大勢の使用人は必要ありませんでした。

階層構造化した使用人の職位

使用人の職種は担当領域内で分業が進み、領域ごとに責任者となる「上級使用人 (upper servant)」がいました。上級使用人は部下を預かり、職務を遂行させました。主人は管理や人事を上級使用人に委ね、使用人を監督する手間を免れました。

上級使用人は自分の担当領域とそこに属する部下にのみ責任を負いました。上級使用人である執事は屋敷内で働く男性使用人を、同じくハウスキーパーは室内で働く女性使用人を監督し、部下の任免権を持ちました。

上級使用人の部下として働いたのが、「下級使用人 (lower servant)」です。下級使用人は上級使用人の指示に従い、役目を果たしました。

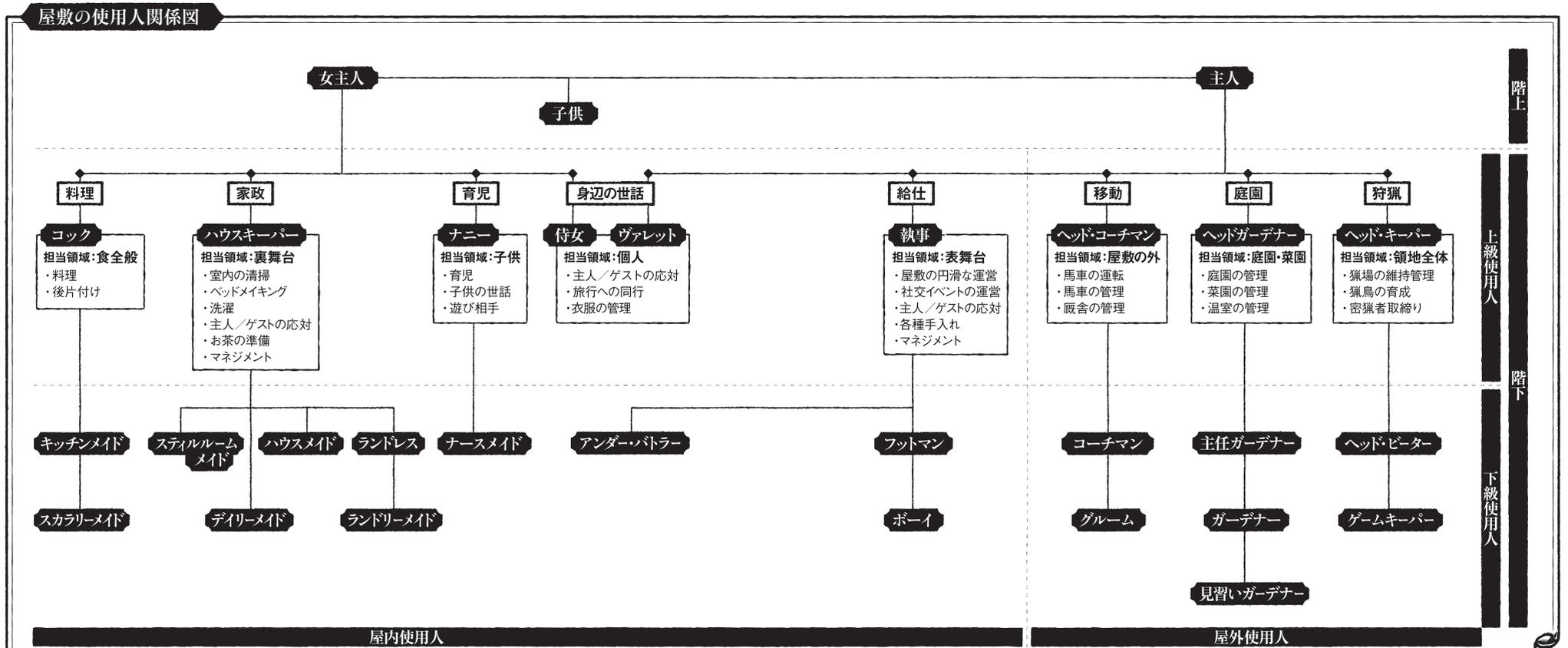
スタッフが多い職場では下級使用人も細分化し、リーダー的なポジションにはじまり、以下、職位が階層化しました。たとえば、料理を担当するコックに次ぐ職種はキッチンメイドで、最下層はスカラリーメイドでしたが、キッチンメイドが3名いればファースト、セカンド、サードのように職位をつけられ、上位者ほど専門的で身体的負荷が少ない仕事を受け持ちました。

スカラリーメイドはキッチンメイドの中で一番格下のメイドより、さらに低いポジションで、キッチン内部でもっとも辛い重労働を課せられました。

◆◆◆◆ 転職可能な職業 ◆◆◆◆

使用人は転職する権利を持ち、より良い職場で働きたい希望を持って、職場を変えていくことができました。

仕事に対する取り組み方は様々でした。働かなければ生きていけない環境の中、生涯の仕事とする者もいれば、結婚までの足掛けとして選ぶ若い女性や、家族の収入を増やすために臨時で働く既婚者、親の死にともない収入確保のため職に就いた、元は使う側だった女性などもいました。



職業としての歴史的経緯

19世紀に代表される英国使用人という職業が持つ特徴は、中世後期(14-15世紀)にまでさかのぼります。当時、使用人を雇うことができたのは、社会の上層に君臨した貴族でした。領主が分立し、家ごとに軍事力を必要とした中世から、強力な王権により統一国家ができ、政治や社交が国王の下で地位を上げるための力となった近世への転換点で、貴族の館に存在した使用人の仕事は変遷を遂げました。

◆◆◆ 主人と使用人の関係 ◆◆◆

1 [中世後期] 封建的な結びつき

中世後期の使用人は、家柄が良い中小地主や有力者の子弟を中心に構成されました。領地を経営する領地管理人、屋敷全体を統括する家令、給仕係や案内役などに就いた彼らは貴族の家に出仕し、自らの土地を守る庇護を得ました。有事には軍事力を提供し、平時は使用人として貴族の領地や屋敷の運営を行った彼らが、後の使用人の職種を形作る原点です。

貴族の傘下に入ることは出世の機会を増やし、出仕した子弟は学芸や武芸を磨き、世間を広げることができました。

家柄の良い人々は後の時代の上級使用人や、主人の傍近くに仕える給仕や侍従の役目を果たし、掃除や皿洗いや様々な雑用は下層階級出身の人々が担いました。彼らは貴族の館に労働力を提供し、生活の保障を得ました。社会全体は農場労働者が大多数を占め、土地に縛られた生き方をしたので、職業の選択範囲は極めて限られました。

2 [近世以降] 職業への転換点

ヘンリー7世に始まるチューダー王朝(1485-1603)は強力な王権を確立し、貴族の私兵は解散され、国内が平和になっていきました。領主間の戦争で勢力争いをした社会構造が変化し、領地の保護を求めた有力者が貴族に仕えるメリットが薄れました。

国内では商工業が新しい時代の力となり、貴族に仕えなくとも裕福になる手段が増えました。貴族の下を離れ始めた地主や商工業で富を得た裕福な中流階級の人々が勢力を伸ばしました。国家による法整備や秩序の構築も、法律、軍務、行政といった専門職の道を開き、使用人のポストは身分の低い人たちが埋めました。

この時代、使用人は期間を限って雇用されました。使用人は『職人法』(1563年)で職人に準じて、労働条件を規定されました。これは後の時代にも続く、使用人の立場を決定づけた最も重要な法律です。

『明確な言及がない限り、その雇用契約は1年間ということになり、どちら側からも勝手にそれを破棄できないと規定された。もし契約不履行の原因が使用人側にあるとすると、その使用人は刑務所に収監されたが、同じ罪が主人側にある場合には、罰金が課されるだけだった。また、使用人は自分の時間をすべて主人に委ねなければならない、法的に認められるすべての命令には従わなければならないことが規定された』³

主人への服従が強化され、怠惰な使用人への懲罰として鞭打ちなども行われました。雇用期間や転職、離職など使用人の境遇にかかわる規定は、時代を経るごとに緩くなりましたが、『職人法』は長い間、雇用主による使用人の支配を許す根拠となりました。

◆◆◆ 使用人の役割 ◆◆◆

1 [中世後期] 軍事的役割とステータスの誇示

城壁に囲まれた「城」(城塞)が当時の貴族の拠点となりました。壁は分厚く、部屋数はわずかで窓が少なく、住まいには快適さよりも安全に過ごす機能が求められました。使用人も有事の軍事力となる男性中心で構成され、女性は貴族の妻子や侍女を除き、ほとんどいませんでした。

城に求められた役割には、日々の食事や、ゲストをもてなすごちそうの提供がありました。もてなしに使った最も広いホールは封建領主と家臣団が集って結束力を示し、富を誇示する場となりました。会食や盛大な祝宴の場で、主人たち上位者は家臣団を見わたしながら、上座の一段高い場所で食事をしました。⁴

様々な機会に陪席し、主人の権威を示すことも使用人の仕事でした。良家の人々を身近にさせさせることは権威を増しました。王族は貴族を、貴族は有力者を、有力者はその配下をさせさせる階層構造が見られました。

貴族の配下の郎党(retainer)と呼ばれる契約関係で結ばれた人々は、城に出仕せず、有事に軍事力を提供しました。郎党は貴族から与えられた家紋入りのお仕着せに身を包み、貴族は動員できる郎党の数や、彼らの服装の華々しさを誇示しました。⁵

3…バメラ・ホーン、『ヴィクトリアン・サーヴァント』P.9
4…マーク・ジリアード、『英国のカントリー・ハウス』上巻 P.76
5…同書、P.49-51

また、この時期、洗濯を行う「洗濯女 (laundress)」や、聖職者や豊かな農場主のもとで働く女性使用人の姿もわずかながら見られました。 6

2 [近世以降] 日々の快適さともてなしの追求

軍隊が解散され、安定した国内で「城」に住む必要が消え、貴族の拠点は「屋敷」(カントリー・ハウス)へと移行しました。城壁を取り払い、分厚い壁を排した屋敷は生活空間としての快適さを主眼に、部屋数が増えたり、高価だった窓ガラスを採用して光を取り入れたり、屋敷の周辺を庭園で飾るなど、過ごしやすさを追求しました。

軍事から政治や社交へ関心が移行したことで、利害関係がある人とのつながりが重視され、屋敷でゲストをもてなす機能がより強まりました。

屋敷には主人の権威や財力を示す場としての役割も加わり、屋外で働く使用人の種類が増えていきました。温室を作って国内では珍しい植物や果物を生産したり、18世紀以降は相互の屋敷を訪問しあうために馬車を所有したり、ゲストを招いてカントリースポーツを行う猟場を維持するなど、高まっていく要求に応じる専門的なスタッフが登場しました。

その一方で、かつての、家柄の良い人々の出仕の減少や、室内の男性スタッフで規模の縮小が見られました。屋敷に存在した役割の統廃合も生じ、たとえばパン切り役や給仕役、案内役など数名分の仕事が、アルコールを管理したバトラーの仕事に吸収されました。

◆◆◆ 近世に生じた新しい変化 ◆◆◆

1 主人との距離

中世では貴族と使用人は出身階級の差が小さく、居住空間がシンプルで部屋数が少なかったこともあって、共有する生活空間が多くありました。しかし、身分の高い使用人が消えていくにつれ、階級差が生じました。また、主人たちにプライバシーを重視する欲求が高まり、城から屋敷へと住まいが変化するとともに、使用人は主人の視界から次第に追い払われていきました。

使用人の職場は、屋敷の地下や離れへ移動しました。臭いが強く、火事の危険もあったキッチンや、主人の生活圏から遠ざけられた代表的なものでした。やがて屋敷には使用人だけが用いる業務用の「裏階段」や、地下の職場で待機する使用人を主人が部屋にいながらにして呼び出すベルなどが登場し、後の時代に受け継がれました。

2 女性使用人の増加

男性が多数を占めた使用人の職は、近世になって女性が増えました。商工業が発展した近世に、待遇がより良い他の職に就く機会が増し、男性が使用人の職種を選ばなくなったためでした。

男性が減った穴を埋めたのは、男性より選べる職業が少なく、相対的に賃金が安かった女性でした。17世紀の終わりには、女性使用人の数が男性使用人を上回りました。1695年時点のイングランドの男女使用人人口推計は、男性26万人、女性30万人となりました。当時の使用人の定義は広範で、農場労働者が含まれた可能性があることを差し引いても、女性使用人は幅広く雇用されていました。さらに、ロンドンに限って言えば、1700年代初めには女性対男性の使用人人口比は4:1という推定もあります。 7

貴族の屋敷では長く男性使用人の雇用を続けつつ、コスト削減のために規模を縮小し、表に出ない使用人を女性に代えました。増加した女性使用人を束ねる職種ハウスキーパーが、家政の要として登場し始めました。

3 規模が小さい職場の増加

使用人の雇用主は、中世後期から近世にかけて、社会階層的に幅が広がっていきました。使用人の雇用は貴族の特権ではなくなり、かつて貴族に仕えた地主階級や、海外交易や製造業で財を成した商人や製造業者などの中流階級の人々は、貴族の生活様式を模倣し、低コストな女性使用人を雇い始めました。

17世紀以降、女性使用人だけで構成された少人数の職場が増加していきました。ここでは雇用主が使用人に直接指示を下し、家事や家業の手伝いをさせました。

中流層の拡大が雇用主の増加に繋がり、低賃金で働く女性使用人が使用人の雇用増大を決定づける要因となり、使用人雇用が普及する原点となりました。

4 農業奉公から使用人への移行期

貴族の屋敷の仕事から派生して上流階級の暮らしを支えた使用人に加えて、17～18世紀にかけては商人や職人のもとで働く徒弟 (apprentice)、農家で働く農業使用人 (servant in husbandry) として他家に住み込みで行う奉公が一般化し、一定の年齢になった子供たちが働きに出ました。

奉公を経た後、職人や商人、農場労働者となって住み込みの立場をやめるか、結婚して世帯を持つまでの間を他家で過ごした彼らは、人生の一局面を使用人として過ごすことから、「ライフサイクル・サーヴァント」と呼ばれ、多くの庶民がその境遇を経験したといわ

れています。

1. 奉公としての使用人

近世イギリス社会の庶民は結婚後に親から独立した世帯を営み、自立する資金を得るまで時間がかかったことで晩婚化が進み、死亡率の高さもありますが、子供は多くありませんでした。⁸ 結婚するまでの過渡期の若者や、自立できる経済力を身につけられなかった人々を受け入れたのが住み込み奉公でした。

主流を占めたのは農業使用人で、零細な農家までが雇用主となりました。職人や商人の徒弟になるには徒弟費が必要とされ、より多くの収入が得られる貿易商人や医師などは高額な費用や縁故が求められ、なり手の身分が限られました。⁹

住み込みの使用人は奉公先では「家族の一員」とされましたが、契約の間は家長に従属し、社会的に自立した存在とみなされませんでした。

農業使用人の衰退は18世紀後半に始まりました。「住み込みより日雇いの方が低コスト」という経済的理由と、「使用人を家族とみなさなくなり、家に彼らを入れることへの雇用主の抵抗」といった家族観にかかわる問題などがありました。¹⁰

2. 農業社会から工業化社会へ

かつて雇用主の家庭内での生産活動に従事した農業使用人の役割は、農村の衰退や雇用主の世帯が商品を市場から買う経済活動に巻き込まれる中で消えていき、消費者となった都市住人に代表される雇用主の家庭で、家事を行うサービス業へ転換しました。「ライフサイクル・サーヴァント」の役割を引き継いだのは、家事使用人でした。

女性にあっては農場使用人の仕事より家事使用人は立派であると考えられ、行儀見習いへの期待から、工場での仕事よりも好ましいとされましたが¹¹、従属的な境遇は続きました。

農業使用人から家事使用人への転換は、農業を主体とした国が商工業による経済発展を遂げる過渡期の現象といえます。工業化が進む世界の国々で同様の変遷が生じ、たとえば19世紀後半に都市市民が増加したドイツや、同じく国力を増す産業化を進めた明治・大正時代の日本にあって、家事使用人として勤めた女性たちは労働人口で上位にありました。

最盛期を迎えたヴィクトリア朝

メイドに代表される女性使用人の雇用はヴィクトリア朝に普及し、最盛期を迎えました。19世紀後半の国勢調査（イングランドとウェールズ）では130万人を超える女性が使用人として働き、女性労働人口で最大勢力となりました。¹²

第二次世界大戦後にかけて衰退するまでの約1世紀の間、家事使用人が巨大な職業集団として形成された原因は、雇う理由を持った人々が増加したことによります。

使用人を必要とした理由

使用人雇用が急激に増加した背景には、商工業の発展で生じた雇用主たちの生活の質的な向上や中流階級の間を広まった生活様式と価値観の変化が関係します。近世以降の英国では家柄や生まれではなく、個人が所有する「財産」と、財力を示す「富の消費」によって、社会的地位が評価される時代を迎えていました。

『ジェントルマンらしい生活をするには、カネと暇が不可欠である。とすると、ジェントルマンの地位を保障するものは、けっきょく富そのものでしかない。(中略) 流行を追って贅沢をする者、そうする経済的能力のある者こそが尊敬さるべきジェントルマンたりうる、とすれば、人びとがこぞって流行を追い、「贅沢」に走るのは当然のことであった』¹³

労働をしなくていい「暇」の状態にあることも富の証明とされました。このような社会に生きる雇用主には、使用人を雇用しなければならない3つの事情がありました。

◆◆◆ 複雑化した生活様式実現のため ◆◆◆

18世紀半ば以降、主要な雇用人層に成長した都市の中流階級の暮らしが富裕化し、貴族をまねて豊富な物資に囲まれた快適な暮らしを営み始めました。

1 家財の増加と手入れの必要性

18世紀にかけて、商工業の発展によって「商品革命」と呼ばれる経済発展が生じま

8…川北稔、『民衆の大英帝国』P.62-63、村岡健次、川北稔編著、『イギリス近代史』P.99-102

9…『イギリス近代史』P.99-101,111

10…『民衆の大英帝国』P.79-88

11…『民衆の大英帝国』P.75-76

12…『ヴィクトリアン・サーヴァント』P.333

13…川北稔、『洒落者たちのイギリス史』P.156

した。数多くの商品が国内に流通し、中流階級は財力を示す商品で家の中を飾りました。

『木製の床が石やレンガの床に取って代わり、以前より多くのカーテンや壁掛け、柔らかな覆いのかかった家具、装飾品、絵画が置かれるようになった』¹⁴ことで、ホコリを払ったり、掃除をしたり、艶出しや磨き上げる作業が増えました。

2 清潔さへの欲求の高まり

清潔さへの欲求は、洗浄や洗濯を行う使用人の負担を質量ともに増加させました。19世紀の中流階級では清潔さは一種の消費となりました。洗濯に費用（水＋人件費など）をかけ、常に清潔な衣服やリネンを使うことは豊かさを示す一種の基準となりました。

『汲みだてのきれいな水を、家事に必要なだけ用意することが使用人の仕事であるのは言うまでもありませんが、汚水を処理するのも彼らの仕事でした。どちらも時間のかかる骨の折れる仕事でした。ひとたび配水設備ができると、衣類や床、カーテンや寝室のリネン類の洗濯や、キッチンの鍋類や陶磁器までもを洗い上げることがずっと楽になりました。するとたちまち、清潔さの基準が上昇し、その当然の結果のようにして、洗濯日や床・階段磨きの頻度も上昇しました。同様に寝室にも、朝と夜に水が用意できるようになり、それがチェンバーメイドやハウスメイドの仕事の主要な部分となっていきました』¹⁵

3 「使用人の仕事を生んだ」石炭

16世紀中頃から17世紀中頃にかけて、燃料が薪炭から石炭へ切り替えられました。耕作地拡大や急速な工業化（製塩、ガラス製造、製鉄など）、海軍の造船による木材の大量伐採が起り、深刻な木材不足が石炭への転換を促しました。家庭に持ちこまれた石炭は燃焼時に煙が出るため、床に据えられた炉は姿を消し、煙を逃す煙突を備えた暖炉に置き換わりました。¹⁶

石炭は煙、煤、タールで周囲を汚し、暖炉の火格子、レンジ、調理器具などを絶えず磨かねばなりません。家庭で使われた石炭の煤煙によってロンドンではスモッグが生じ、日光が遮られたうえに、服や窓ガラスは煤で汚れ、洗濯物を干す障害となりました。¹⁷

衣食住すべてに石炭は影響を与え、その対応はメイドの仕事の根幹を成しました。

◆◆◆ 贅沢さの追求 ◆◆◆

上流階級は多数の使用人を雇用して、容易に模倣し得ない贅沢な生活をする中で、社会的ステータスを引き上げました。家庭内の生活上のサービスを女性使用人に求めたのに対し、男性使用人の仕事は対外的な贅沢の顕示や社交上の必要を追求したものでした。

男性使用人の雇用には贅沢税が課された上に賃金が高く、雇用すること事体が豊かさの証明になりました。フットマンと呼ばれる職種は宮廷での公式行事や儀式の際には舞台俳優にも似た衣装に身を包み、家の権威を示す役割を担いました。

屋敷を構えることも富の顕示となりました。広大な敷地を持つ屋敷にしか見られない贅沢な暮らしを実現するために雇われたのが、屋外で働く使用人でした。

- ・馬車を所有するから、コーチマン（御者）が必要。
- ・馬がいるから、厩舎とグルーム（厩舎番）が必要。
- ・庭園と菜園と温室があるから、ガーデナー（庭師）が必要。

厩舎のスタッフやガーデナーのスタッフ数は、時に屋敷内で働く使用人の倍以上となりましたが、贅沢を享受するには必須の存在でした。

◆◆◆ 顕示的消費（ステータスシンボル） ◆◆◆

中流階級にとって使用人雇用の意義とは、雇用で得られる利便性以上に、中流階級として社会的に認められることにありました。使用人を雇用して初めて中流階級だと安心でき、雇用していないと労働者階級と見なされかねない価値観が、ヴィクトリア朝には流布しました。

1 富を証明する「閑暇」へのニーズ

上流階級の贅沢に憧れた中流階級は「貴族のように妻や娘を働かせない」ことで自身の富裕さを証明し、社会的ステータスを引き上げようと試みました。社会学者のソース・タイン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』の中で名づけた、「見せつけるための消費」（顕示的消費）として「妻子に代わって家事を行う」使用人が雇用されました。

妻や娘が担った生産的役割の必要性の低下も、閑暇に寄与しました。17世紀から発展した商品経済の影響が18世紀には家庭内に波及し、かつて家庭内で製造された

14…SERVANTS, P.39-40

15…ibid., P.40

16…角山榮、川北稔、村岡健次、「生活の世界歴史 10 産業革命と民衆」P.27, P.35-36

17…ローレンス・ライト、「暖房の文化史」P.177-178

『チーズや石鹼、洗濯糊、蠟燭、パン酵母、モルト、保存食、塩漬け肉、香水、軟膏、医薬品、タペストリ、マットレス、枕、手袋、帽子、家で使うリネン、男女の下着や衣類全般』は市場の商品へと替わりました。18

家事に含まれた掃除や清掃、料理といった役割は使用人に委ね、雑貨は外から購入し、中流階級の妻や娘たちは空いた時間を消費する役目を負いました。有閑化した妻に贅沢をさせる「顕示的消費」が大きいほど夫の財力が証明されてビジネス上の信用に繋がるとも考えられました。19

2 「家庭の天使」像

有閑化した女性は貞淑で道徳的な振る舞いによって、外で働く男性を癒す役割を求められました。男性は外で働き、女性は夫が心地よく過ごせる家庭を運営する責務があったとした「家庭の天使」という役割分担・価値観が中流階級で流行しました。

家庭は癒しの場であると同時に、もてなしの場でした。上流階級が大勢のゲストを招いて利害関係者をもてなしたように、中流階級も小規模ながらゲストを招き、ディナーを執り行いました。場を切り盛りする使用人を管理することが妻の責務とされました。

女性最大の労働人口

ヴィクトリア朝では中流階級の数が増大し、それに比例する形で使用人需要が急激な伸びを示しました。1851年から行われた信憑性が高い国勢調査の数字（10年ごとに更新）は全体的な使用人の増大と分業、とりわけ女性使用人の増加を示しています。

◆◆◆ 最盛期に増加した中流階級の雇用主 ◆◆◆

1851年の国勢調査では約85万人（男10万人・女75万人）だったイングランドとウェールズの使用人口は、ヴィクトリア朝が終わる1901年には約150万人（男21万人・女128万人）に膨れ上がりました。

使用人需要を急激に増加させたのは裕福な上流階級ではなく、ヴィクトリア朝に増大した中流階級でした。中流階級の多くは、使用人をやっとひとり雇える財力に過ぎず、「全部ひとりでやる」メイド（メイドオブオールワーク）を雇いました。

国勢調査（1861年と1871年）では「雑役家事使用人（Private Indoor Service/

General Domestic/Servants）」と記された、何でもするメイドが女性使用人全体の3分の2を占めました。雑用メイドの増加は、初めて使用人を雇えるようになった新しい中流階級の増加を意味し、相対的に財力を持たない彼らによって職場環境や労働条件の水準が下がりました。

◆◆◆ 専門職を必要とした富裕な中流階級の増加 ◆◆◆

国勢調査は、同僚と仕事を分業するハウスキーパーやコックなどの専門職の労働人口増加も示しました。この増加は、より多くの専門的な使用人を雇用できる裕福な人々の増加を意味しました。収入の増加は生活レベルを上昇させると同時に、より多くの消費と多くの使用人雇用を生み出しました。

『妻たる女性はだれでも、その資産が増加するにつれて、労働を伴う家事のほとんどを他人の手に委譲する。それだけの余裕ができるやいなや、彼女はまず通いの洗濯女を、それから雑役婦を、次に料理人兼女中を、1人か2人の乳母を、ガヴァネスを、彼女自身の侍女を、家政婦をといった順に雇っていく。——そしてそれら使用人への支払いが彼女の資産を超えてさえいなければ、そのように次々と家事使用人を増やしていく彼女の行動が途中でとがめられるということは一切ない』20

19世紀半ば以降、長期にわたって中流階級の主婦の必読書とされた家事マニュアル『Mrs Beeton's』などでは、年収に応じた使用人の最適な雇用人数をアドバイスしました。これらは、財力で実現する生活様式・消費によって個人が評価される社会の中、雇う使用人の数や種類までが評価指標となったことを示しています。

◆◆◆ 抑制された男性使用人の雇用数 ◆◆◆

男性使用人が高い比重を占めた使用人口は17世紀末には男女比が並び、18世紀にかけて男女比の逆転が進み、19世紀初頭には屋内で働く使用人の男女比1対8弱、1881年の国勢調査では1対22に拡大したと推定されています。21

16世紀から17世紀にかけて産業の発展によって男性が選択できる職業の幅は広がりましたが、女性は依然男性より選べる職業が少なく、女性使用人の増加が進んだのは先述のとおりです。その結果、男性より賃金が安いメイドを少数だけ雇用する家庭が増加していきましたが、18世紀にはさらに男性使用人の雇用を控えさせる主に2つの要因が生じました。

18…Ernestine Mills, *THE DOMESTIC PROBLEM*, P.18
19…プラム・ダイクストラ、『倒錯の偶像』P.29-30

20…バンクス夫妻、『ヴィクトリア時代の女性たち』P.100
21…『ヴィクトリアン・サーヴァント』P.16-17

1 扱いにくさ

男性使用人が自立の気風を強め、主人に対して反抗的な態度を取るようになっていくと、雇用主にとって扱いやすく、訓練しやすく、賃金も安い女性使用人が好まれました。

22

2 男性使用人雇用の高額化

対外戦争を繰り返した18世紀の英国政府は様々な増税を試み、男性を使用人として個人的サービスに従事させることを贅沢とみなし、男性使用人の雇用に税を課しました。

この贅沢税は、男性使用人雇いを抑制するとともに分業を促進しました。男性使用人には農場労働や厩舎の世話や主人の家業の手伝いをしつつ、家の中での給仕を兼務する傾向がありましたが、屋内で勤務する男性使用人の雇用に課税が行われた結果、どちらかの役目に絞られました。

労働市場の需要と供給

100万人以上の人々が使用人として働いたヴィクトリア朝の環境は、雇用主による需要と被雇用者となる使用人の供給が噛み合ったことで生じました。社会の上層にあった「上流階級 (Upper Class)」の特権だった使用人雇用は、経済力を増す「中流階級 (Middle Class)」へ徐々に広がり、使用人を雇う理由を持つに至った彼らが需要を拡大させました。

使用人の供給源となったのは、最も人口が多かった「労働者階級 (Working Class)」です。彼らの出身家庭は収入が少なく、貧しい生活を強いられ、商工業が発展した都市部へ使用人として勤めに出ました。

ヴィクトリア朝のイギリスでは経済繁栄を享受した「裕福な層 (上流・中流階級)」と、貧困に陥った「労働者階級」の経済格差が拡大しました。所得の再分配政策 (税制) がほとんどなかった当時、小説家・政治家ベンジャミン・ディズレーリは小説『シビル』で「2つの国民」と表現しました。

『2つの国民。その間には、何の往来も共感もない。彼らは、あたかも寒帯と熱帯に住むかのように、また全く別の遊星人であるかのように、お互いの習慣、思想、感情を理解しない。それぞれ違ったしつけで育てられ、全く違った食物を食べている。お互いに別のしきたりがあって、同じ法律で統治されてはいないのだ』²³

使用人の労働市場は多くの貧しき人々の存在に支えられ、この需要と供給のバランスが崩壊する第二次世界大戦期まで続きました。

雇用主の年収と雇用人数の関係

階級	下層中流階級	中流階級				
世帯年収	150ポンド～	350ポンド	500ポンド	750ポンド	1000ポンド	1000ポンド以上
雇用可能人数	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上
職種	・メイドオブ オールワーク	・メイドオブ オールワーク ・キッチンメイド	・ハウスマイド ・コック ・ナースメイド	・ハウスマイド ・コック ・ナースメイド ・コーチマン兼雑用	・ハウスマイド ・コック ・ナースメイド ・コーチマン兼雑用 ・侍女	・ハウスマイド ・ナースメイド ・コーチマン兼雑用 ・侍女 ・執事

人口比

使用人1人の職場: 約78万人	2人以上の職場: 約42万人
約66%	約34%

24

【需要】豊かになる人々

17世紀半ば以降、清教徒革命や名誉革命を経て王権が弱まり、貴族に代表される地主や商工業者が権勢を拡大しました。英国は対外戦争を繰り返して植民地支配を広げ、植民地の資源や保護貿易を通じて国力を増す重商主義政策を行い、19世紀には覇権を握りました。

保護政策と植民地経営と貿易に代表される商工業の発展は、裕福になる様々な機会を生みました。貴族や地主たち上流階級は資金を商工業へ投じ、帝国を形成する英国

の発展にかかわりました。

産業革命に代表される工業化の時代には、産業資本家を代表とする中流階級が躍進して独自の文化を築き、ヴィクトリア朝には使用人の主たる雇用主となりました。国が豊かになる中で職業の種類も増大し、使用人を雇用できる下層の中流階級が増えました。

◆◆◆ 伝統的な地主階級の富裕化 ◆◆◆

上流階級は、王侯貴族と地主に代表されます。わずかな人口に過ぎない彼らは広大な土地を占有し、領地から上がる収益に長く支えられました。

18世紀から19世紀初頭にかけて大地主は小地主や零細農家から土地を買い上げる「第二次囲い込み」を通じて効率的な大規模農場経営を行い、生産力を高めました。囲い込みは地代上昇や、共有地の私有化・開墾や放牧を生み、共有地から採れる燃料や資源を利用した零細農家は生活できなくなり、土地を売って農場労働者へと転落しました。

資源や土地を持つ地主は初期の炭鉱業や製鉄業に少なからず関与し、鉱山採掘権や鉄道への投資などを通じて、土地以外の手段で資産を増加させる機会を持ちました。

地主たちは富を蓄積し、豊かさを謳歌しました。屋敷を建てる資金や大勢の使用人の人件費も土地が生み出したと言えます。第一次世界大戦直前まで、貴族を中心とする社交界は全盛を極めました。ロンドンでは連日連夜、様々な屋敷でパーティが執り行われ、領地でも狩猟やスポーツを通じた大規模で豪華なもてなしが行われました。

◆◆◆ 台頭する商工業 ◆◆◆

19世紀の英国は経済成長に支えられ、地主階級と異なる、商工業に従事する商人や産業資本家や工場主の増加が生じました。

最初に台頭した富裕層は、植民地の貿易や開発にかかわる人々でした。17～18世紀の英国では、拡大した植民地で砂糖や綿花の生産を行うプランテーション経営や、労働力として用いた奴隷の売買、植民地から輸入した原料を加工した商品を輸出品とする「三角貿易」に代表される重商主義が推し進められ、商工業の発展を促しました。

機械や蒸気機関、工場による生産が本格化した1780年代以降、紡績業は著しく生産量を増し、輸出量を増やしました。工業化と都市化が進んだ1830～50年代に英国は農業国から工業国へと転換し、1850年代以降は商工業が飛躍的に成長しました。²⁵

中流階級は発展を遂げることで、19世紀には上流階級へと融合や同化を進め、支配

階級へと加わっていきました。²⁶

◆◆◆ 幅広い中間層の増加 ◆◆◆

19世紀には政府や公的機関の機能が次第に拡大して人員を必要とし、治安改善のための警察機構は警察官を、郵便網の整備は郵便職員を、児童教育の義務化は教師を生み出した。中流階級の躍進によって、上流階級に独占された公務員や軍人への門戸も開かれました。

土木事業や建築需要の高まりや高度な機械の増加、商取引の複雑化によって専門知識を持つ要員として、建築家や土木・機械のエンジニア、会計士などの専門職が求められました。²⁷

さらに、都市化が進み、家庭内での生産を行わずに市場から商品を買う消費者が増大すると多様化する社会のニーズを満たす新しい職（写真技術の普及は写真屋を、加工食品の普及は食品加工業者と販売業者を）が登場し、事務員や営業職などのホワイトカラーが増加しました。²⁸

〰〰〰 [供給] 労働者階級の増加 〰〰〰

使用人の中核を成したのは、人口の大多数を占めた労働者階級と呼ばれた人々でした。地主が所有した農場の労働者や石工や鍛冶屋などの職人、使用人、店舗を構えず商業に従事する商人などを含みます。

使用人という仕事は決して労働条件の面で恵まれたものではありませんが、その環境を受け入れて働く人が大勢いたのは、人口の増加や、国が発展の途上にあって困窮者や失業者が多かったことも影響しています。

経済発展を遂げて国全体が豊かになった半面、富が人口のわずかな層に偏り、貧富の差が著しく拡大しました。国民の大多数である彼らの生活基盤は脆弱でした。生産手段を持たない労働者、いわゆるプロレタリアートの増大が見られました。

発展する都市で働く労働者は生活に必要な物資を購入しなければならず、賃金に依存する暮らしを余儀なくされました。農場労働者は土地囲い込みの中で、燃料や家庭内で必要な食品類を生産する基盤を奪われ、商品を買う現金を必要としましたが、給与水準は低いものでした。

社会のルールが未整備で、社会福祉が十分に整っていなかった時代には、多くの

人々が貧しさの中で生き、ささいなきっかけで深刻な困窮に陥りました。収入が良い職に就くには教育を受けなければならず、そのための費用が必要でしたが、負担できた人はわずかでした。

◆◆◆◆ 使用人職が選ばれた理由 ◆◆◆◆

使用人職には「就職しやすい」「親の経済的負担が減る」「将来を期待できる」といったメリットがありました。

1 親に都合が良い待遇

使用人職が最も好まれたのは、「親が養う子供の数が減る」からです。子供が工場労働や店員の仕事に就いても、家から通う場合は親の負担となりました。

それに比べ、住み込みの使用人の仕事では、親は子供の扶養の負担を免れ、子供自身も実家よりましな食事が期待でき、生活水準の向上が望めました。工場労働より安全で、就業するための準備がさほど要らないのも魅力的でした。一方、鍛冶屋や大工といった職人になるには徒弟費の負担（数十ポンド以上）が必要で、貧しい家庭では捻出できませんでした。

その上、数多くの需要が見込まれる使用人の仕事は待遇を選ばなければ就職先に困らず、経験が浅い子供でも就業可能でした。ただ、未熟な労働者の賃金は安く抑えられ、裕福ではない下層中流階級の家が受け入れ先となりがちでした。

2 将来を期待できる職業

若くして使用人となることは、自分より上の階級の家で礼儀作法を学ぶ機会と考えられ、女性の場合は結婚後に必要とされる家政を学ぶ機会と捉えられました。男性の場合も同様で、貯金がしやすい点は結婚相手として望ましい資格にもなりました。

使用人は運が良ければ（そして戦略的に動けば）、転職を通じて徐々に働く屋敷のランクを上げることもできました。上に行けば行くほど社会的に恵まれた階層へと近づけるので、良い報酬や結婚相手として望ましい相手との出会いが期待できました。

◆◆◆◆ 使用人として勤めに出される環境 ◆◆◆◆

使用人の仕事を選ぶかどうかは生まれた環境に強い影響を受けました。周辺に産業がなければ、生活のために仕事がある地域へ勤めに出されました。多少余裕のある労働者階級の家では未婚の子供を勤めに出さずに家事をさせましたが、不況の折には

子供を外で働かせました。

1 選択肢がない状況での選択

18世紀からの使用人増加を支えたのは農場労働者層です。18世紀には困い込みを主体とした農業革命の影響や重税で、自作農たちは土地を失い、農場労働者となりました。農村には選択可能な仕事が多く、子供は他の地域へ働きに出されました。農場労働者の子供は「都市の住人よりも真面目で使用人に向いている」と雇用主から好まれました。

使用人の家庭も供給源でした。使用人の親をもつメリットは、親の人脈や使用人の職業の実態を知った上で働けること、待遇の良い職場で働く道筋を学べることです。執事の子が執事となったとしても、それは世襲ではなく、執事になる道筋を親に教わることと無縁ではありませんでした。

貴族の領地に住む農場労働者や大工や鍛冶屋、森林管理者なども子供を屋敷で働かせました。領地に住む人間は見習いとして入りやすく、優遇される傾向がありました。領地を預かる管理人は領地内で勤めに出来る人間を把握し、スカウトしました。

困窮した貧困者を収容した救貧院で育てられた子供や、慈善目的で設立された学校や孤児院などの施設にいる子供も、若いうちから使用人として働きに出されました。他の労働者階級の家庭同様、養育機関は長く彼らを養う余裕がなかったためです。

18世紀には子供を就職させるため、職人の徒弟奉公同様に、養育機関が徒弟費を雇用主に支払って面倒を見てもらう就労対策が行われました。女子が使用人職に出され、男子は農場労働などに送られました。

2 環境が変化した結果の選択

特に工場労働者や鉱山労働者などの間では、子供を使用人にするのは好まれませんでした。工場や鉱山の産業で働く能力を持たない人間が使用人になるとの偏見や、子供を働きに出さず家事労働力として利用できる資力を持っていたことが影響しました。しかし、不況が訪れて地域の産業が沈滞すると、稼ぎ手の親の賃金低下や失業が起り、子供を働きに出す家庭が増えました。

熟練したスキルを有して高い報酬を得た「労働貴族」とも呼ばれる熟練労働者（職人や技師、工場での職工長、石工、大工、鍛冶屋など）も同様でした。ヴィクトリア朝を代表する上層労働者の年収は下層中流階級に近く、余暇やレジャー産業で消費者となり、子供を使用人として働きに出さずにすむ経済力を持ちました。

事情があって働きに出す際には、娘が最下層の使用人とならないように、帽子屋や仕立て屋での修業費用を負担して上級使用人の侍女となる道筋を与えたり、体力がつく年齢まで育つのを待ったりする経済的余裕がありました。

就業機会が非常に限られた中流階級の女性は、稼ぎ手の父(夫)を失うと働きに出ました。「家庭の天使」とされた中流階級の女性が働くことへの偏見は強いものでした。中流階級としての立場を失わない仕事として帽子屋や仕立て屋などの被服業、それにガヴァネス(女家庭教師)がありましたが、高い専門性を求められました。

彼女たちにとって、使用人の仕事は始めやすい仕事と考えられました。中流階級の女性には使用人の管理経験があるとも思われていましたので、ハウスキーパーや侍女やナースとなる道筋を選ぶことができましたが、階級を捨てる覚悟が必要でした。使用人不足が深刻化した一時期、中流階級の女性を「淑女手伝い(Lady Help)」として働かせる試みが一部で行われましたが、雇われる側の女性たちに受け入れられずに失敗しました。

しかし、実態こそ国勢調査の数字からは見えにくいものの、親戚の家での手伝いや勤めは比較的多いものでした。研究者 Edward Higgs は、1851年の国勢調査では家庭内使用人に分類された女性の多くが親族の使用人ではないとされているが、Rochdale で家庭内使用人とされた大部分が家主や下宿人の親族で、Rutlandshire 地方では同年、同様に25%が親族だと指摘しました。▶ 29

使用人の職場環境

雇用主の住まいに住み込みで働く使用人の職場環境は雇用主の経済力と生活様式で決定づけられました。雇用主の階層は上流階級から下層中流階級まで様々で、裕福な貴族と小規模小売店主の家では職場環境、生活水準、スタッフの数など何から何まで異なりました。

主人の住む建物の物理的な設備(広さや構造)は仕事のしやすさと過ごしやすさに繋がり、主人の生活様式(社交の頻度)は仕事の量や質を変えました。

使用人の労働環境を決定付けたもうひとつの要素は、主人との距離、階級意識でした。雇用主は「男主人」(master)「女主人」(mistress)と呼ばれ、その言葉どおり、使用

人の上位者として君臨しました。使用人は仕事を行うだけでなく、彼ら主人・女主人に従属する態度を示すことを要求されました。

主人の階級別職場環境

ここでは、使用人の職場環境を代表的な「上流階級(富裕な中流階級も含む)」「中流階級」「下層中流階級」の3つに分類します。冒頭で取り上げた組織図やスタッフ構成は上流階級にのみ見られたものでした。

◆上流階級:領地+ロンドン(+海外)=社交中心・移動が多い◆

貴族や地主に代表される上流階級は、広大な土地を所有し、その中に屋敷「カントリー・ハウス」を構えました。カントリー・ハウスとの対比で、ロンドンの議会開催中や社交の季節に滞在した屋敷は「タウンハウス(ロンドンハウス)」と呼ばれました。タウンハウスは、カントリー・ハウスをロンドンに持ち込んだような豪華絢爛たる邸宅です。

貴族は早ければ議会が始まる年末から首都ロンドンへ出向き、社交の季節「シーズン」(主に5~7月)を迎えました。ゲストをもてなすパーティが連日開催され、社交界にデビューする女性が国王に謁見するデビュタント、競馬場でのレースや、テムズ河での様々なイベントを楽しみました。

狩猟が解禁になる夏以降には、再び自分の領地へと戻り、領地を中心にした狩猟や狐狩りといったカントリースポーツや、知人を滞在させてのディナーパーティ、ダンスパーティなどのもてなしを行いました。

1 使用人の仕事

使用人は一部の留守番を残して貴族に同行し、彼らが領有(あるいはレンタル)する屋敷で業務を執り行いました。社交の季節にはロンドンへ、狩猟の季節には狩猟を行う屋敷へ、馬車や鉄道を使って国中を移動しました。

ゲストとして知人の屋敷やホテルへ滞在する場合や、フランスやイタリアなどへの海外旅行には、主人の傍に仕え



家具や装飾品が増え、掃除の手間が増した当時の室内。▶ 30

る従者のみ同行し、他のスタッフは屋敷に残りました。

屋外で雇用される使用人はこのレベルの屋敷にのみ見られ、常に領地に留まりましたが、主人が旅先で同じ生活を楽しめるように、育てた野菜や果物、花、それに狐の獲物などを主人のもとへ送り届けました。ロンドンの生活で汚れた衣服やリネン類がロンドンから領地に送られ、洗濯して送り返すことも行われ、屋敷はロンドン生活を支える拠点として機能しました。

2 職場環境と待遇

主人の生活は社交が中心を占め、主人がどれだけのゲストを招くのか、どのくらいの期間ロンドンで過ごすのかなどによって使用人の業務量が大きく異なりました。ゲストが多い屋敷では、深夜労働や徹夜での労働も行われました。

ただし労働の見返りは大きく、環境としては最も恵まれ、裕福な貴族の使用人にふさわしい賃金や住環境、食事、そして使用人のためのパーティなどレクリエーション面でも厚遇されました。

スタッフの人数と種類は最も多く、主人の代理人としての上級使用人が大きな権限を持ち、さながら主人のように下級使用人を監督しました。上司から技術を教わったり、同じ境遇の同僚との人間関係を楽しんだり、仕事以外の関係を持つ余裕もありました。

◆◆◆ 中流階級:ロンドン/都市圏や郊外の住宅=上流階級の模倣 ◆◆◆

中流階級（主に年収が300ポンド以上）は、社交よりも家庭を大切に、道徳的であろうとしました。上流階級ほど華々しい生活はできませんでしたが、執事を含む複数名の使用人を雇用し、住宅を借り、馬車を所有したりするだけの経済力を持ちました。

都市の中流階級は主に「テラスハウス」に住みました。美しい外観をした棟が連なり、内部の部屋数や階数といった構造が類似した連棟式の建物で、今もロンドンの古い街並みの特徴づける建築様式です。間口は狭く奥行の深い建物でしたが、ゲストを招いたパーティが行えるぐらいには広く、社交の舞台として使われました。

地方に住む牧師や農場主などは邸宅を構え、小規模な屋敷で生活しました。地方に根ざした人々は領地を支配する上流階級とも接点を持ち、交流の機会を持ちました。

ヴィクトリア朝はレジャーが盛んになった時代でもあり、鉄道の普及は観光地や避暑地への移動を容易にしました。また都市圏では田園への憧れが強く、郊外に住んだり、地方に別荘を持ったりと、領地に根ざした上流階級の暮らしを模倣しました。

1 使用人の仕事

基本的には上流階級の使用人と同じく、主人の社交を支えました。規模が小さいものの、行った仕事は似ていました。都市で職業を持つ中流階級の人々は家と職場が分離されていて、使用人の仕事は家事に限定されました。

仕事は細分化されていたものの、人数が少なかった分、忙しいときには兼務したり相互に手伝ったりしました。中流階級の屋敷に勤めたハウスメイドは、掃除の仕事に加えて男性使用人が務めた給仕や玄関での応対を行ったり、侍女のように女主人の世話もしました。

都市圏では建物が通行人の目に触れることもあり、玄関の金具や玄関前の小道などの清掃に力が入られました。

馬車の所有者は御者に送り迎えをさせ、家庭菜園や庭園を持った主人は庭師を一人だけ雇うか、御者に庭師の仕事をさせるなど、主人が雇用できるスタッフの数とニーズに合わせて、仕事が割り振られました。

2 職場環境と待遇

テラスハウスは狭い土地に縦長に作られた構造上、複層階化しており、階段を上り下りする使用人には苦勞が多い職場でした。使用人の職場は地下にあり、歩道と建物の間に地下へ通じる階段（使用人専用）のある空間「ドライエリア」がテラスハウスを特徴づけました。使用人にとって、ドライエリアは外の世界を見る限られた「窓」でした。

同僚が10人以上になることはなく、人間関係は地方の邸宅より密接になりました。主人との距離も近く、その分だけ、主人次第で働きやすさが大きく変わりました。寝床は地下か最上階の屋根裏部屋と不便でしたが、都市圏では外出や出会いの機会に恵まれました。

一方、地方の邸宅は貴族の屋敷を小規模化したもので、都市に比べ過ごしやすい住環境でした。

◆◆◆ 下層中流階級:都市郊外=ささやかな贅沢 ◆◆◆

雇用主として圧倒的多数を占めた下層中流階級は、華やかな社交界に参加するメンバーではなく、交友範囲は限定的でした。それでも、小さいながらも社交界のディナーやもてなしを真似て、知人たちとの交流をしました。

彼らもレジャー産業の消費者となりましたが、外出の機会は他の雇用主よりも少なかったようです。中流階級同様に家庭を大切にしようとする傾向がありました。

下層中流階級の住まいとして代表的なものが、「サバービア」と呼ばれる、郊外住宅です。鉄道の発展で、郊外から職場への通勤が実現しました。一戸建てに見える「左右対称で2軒が隣接する建物」(セミデタッチト)は一戸建てより安価で、郊外の生活に憧れた彼らのニーズを満たしました。 31

1 使用人の仕事

下層中流階級で働いたのは、雑用メイド、メイドオブオールワークと呼ばれる、ひとりですべてをこなすメイドでした。女主人が家事を手伝うこともありましたが、多くの場合、力仕事や雑用まですべてメイドが担いました。

20世紀前半に勤めに出た Winifred Foley は15歳の少女だった頃、子供がふたりいる下層中流階級の家には雇われました。

『彼らは若くて頑丈な愚か者を必要としていました。朝6時から午後1時まで家を掃除するハウスマイド、その後は食事を給仕してくれるパーラーメイド、それから子供たちの午後の散歩に付き添うナースメイド、夕方には洗濯女、それをひとりでこなすメイドを。彼らはまた、わずかな燃料で動き、そのことに疑問を持たない生き物を求めていました。

……私はまずできるだけ早く逃げ帰りました。それが間違っているとは思いませんでした。それから、私は見栄を張って使用人を雇うような家では絶対に働かないと心に決めました』 32

2 職場環境と待遇

職場環境は最低のものでした。賃金が安く、住まいは狭く、使用人のための十分なスペースが確保されませんでした。下層中流階級が無理をして使用人を雇った結果、使用人の扱いに最も苦勞しました。安い賃金しか払えない彼らの家庭で働くのは、未熟な使用人ばかりだったためです。

下層中流階級は使用人の扱い方を知らず、にもかかわらず多くの仕事をさせようとしてきました。家事に不慣れた女主人から直接命令を受けるので、いっそう働きにくくなりました。

運が良ければ家族同様に暮らしましたが、勤めに出た少女が孤独な環境で心に傷を受けることさえあり、多くの場合は使用人にとって過ごしにくい職場でした。

「階上と階下」のルール

階級が違う主人と使用人が過ごす屋敷には、様々なルールが存在しました。最優先されたのは雇用主のプライバシーと快適な暮らしでした。そのために、屋敷に同居した主人と大勢の使用人の間には、明確な線が引かれました。

「階上 (Upstairs)」と呼ばれる主人たちだけが過ごす豪華な生活空間で、用事があるとき以外、使用人は姿を見せてはなりません。使用人の職場は、屋敷の主人の目に入らない地下の「階下 (Downstairs/Belowstairs)」に作られました。必要があれば使用人はベルで呼び出され、それ以外のときは自分たちの職場で課された仕事をしました。

階上で部屋を掃除するハウスマイドは、姿を見られても声を聞かれてもいけません。両者は同じ屋敷に居住しながら、別々の世界を生きました。階上を見たことがない使用人もいれば、主人と話したことがない使用人さえいました。

さらに、使用人は主人が定めたルールで仕事を行い、主人に接することを求められました。1901年に刊行された『Rules for the Manners of Servants in Good Families』には、使用人と主人との間の接し方の一例が出ています。 33

『伝言がある、あるいは必要な質問をするというのでないかぎり、自分から紳士淑女に話しかけてはいけません』

『屋敷の通路や居間で、あるいは紳士淑女のいらっしゃる前で、必要もないのに使用人仲間や主家のお子さん方に話しかけてはいけません。話す必要のあるときは、静かに話さない』

『屋敷内で紳士淑女に出会ったときは、後ろに控えるか、脇によけて道を譲りなさい』

『主家の方やお客様に手紙や小荷物を届けるときは、必ず小さな丸盆か小さなトレイに載せて運ぶこと。もしも何かを手渡したり、盆から手で取り上げたりしなければならぬときは、お渡しする方に手で直接でなく、相手の近くのテーブルの上に置くこと』

『荷物を運ぶなどのことで、紳士淑女と一緒に歩くように言われたときは、つねに数歩下がって従うようにしなさい』

31…下層中流階級の価値観を含むイギリス階級社会の解説は新井潤美著、『階級にとりつかれた人びと——英国ミドル・クラスの生活と意見』(中央公論新社)に詳しい。

32…Pamela Horn, *LIFE BELOW STAIRS in the 20th Century*, P.53

33…Frank Victor Dawes, *NOT IN FRONT OF THE SERVANTS*, P.35

中流階級による使用人の職場への影響

本書で扱う使用人たちの世界に特徴的な組織や暮らしの一部は、中流階級の影響を受けたものです。18世紀から雇用主の主流となりつつあった中流階級はヴィクトリア朝を牽引し、社会全体に道徳観・規範意識で強い影響を与え、商工業を背景とした独自の価値観も合わせ、上流階級の屋敷で育まれた使用人の雇用形態や労働環境を変質させました。

厳しい規律と秩序

上流階級では封建的關係で働く者の面倒を見た役割を次第に放棄し、主人と使用人の関係 (master and servant) は賃金を介する雇用契約に基づく雇用主と被雇用者へと転換していきました。商工業経営者など新興の中流階級は、家庭で働く使用人を労働者として扱い、事業における職場と同様に、厳しい規律に従わせて秩序を保ちました。

昔から規則に基づく運営や時間管理を行った貴族の屋敷もありましたが、中流階級の雇用主は商工業経営の概念を持ち込み、それ以前の時代より職場の規律や時間厳守、物資の管理 (家計管理) が強調されました。 34

18世紀のうちに主人による家父長的な家族・使用人支配が弱まり、それが主人と使用人との間にあった規律を緩め、使用人は自律的になりました。19世紀初頭、享樂的な消費を行い、統治能力にも疑問を呈された貴族たちと、規律の緩んだ使用人は中流階級の批判を呼び込みましたが 35、やがて上流階級でも中流階級の影響から、使用人の職場に規範や道徳的要素が重視されるようになりました。

使用人との関係がドライになった主人たちの視点の一つに、使用人を交換可能な道具とする見方がありました。19世紀後半から働いた執事 Eric Horne は次のように指摘しました。

『使用人はその屋敷の家具の一部みたいなものです。生きている家具、ただそれだけです。ロンドンのタウンハウスに置かれた生きた家具がカントリー・ハウスで必要

になったから移す、あるいはその逆をする。それだけです。生きている家具の心や身体の一部が壊れたら、主人はこう言うだけでしょ。

「壊れたものは捨てて、新しいものを入れよう」 36

19世紀半ば以降は、働く職場で使用人の個性の発揮は不要とされ、道徳を重んじた中流階級のモラルが押し付けられました。没個性で主人との見分けがつきやすい制服や、華美な服装の禁止といった習慣は後の時代にも続き、使用人を縛りました。

◆◆◆◆ ヴィクトリア朝に見られた分業 ◆◆◆◆

分業はアダム・スミスが『国富論』で指摘したように業務の効率化をもたらす考え方です。ヴィクトリア朝に前後して職種の細分化が進み、屋敷の中で仕事専用部屋が数多く作られるなどして、業務効率が高められました。

国が豊かになることも、結果として職務の専門化を進めました。たとえば、男性使用人のフットマンが担った護衛の役目は警察官が担い、主人同士のやり取りは電信や電話へ移るなど、役割を減らしました。 37

ところが、使用人の賃金が上昇し、19世紀末から使用人不足が深刻化したことや、20世紀初頭から地主階級が高額の課税でコスト削減を迫られたりする中で、多くの使用人の雇用が難しくなり、分業はしづらくなっていきました。外部サービス (クリーニングやレストラン) の利用や掃除機などの家事機械の導入が進み、少数の使用人による兼務での運営が可能となったのも、後押しとなりました。

『19世紀の古い使用人のヒエラルキーという馬鹿げた専門化は、多くのカントリー・ハウスが縮小する環境下では居場所がなく、雇用主はジョージ朝のカントリー・ハウスでは一般的だった兼務へと逆戻りしたのです』 38 と指摘されるように、分業による効率化・専門化はどちらもヴィクトリア朝に目立った特色でした。

上級使用人 / 下級使用人

ヴィクトリア朝期の使用人の職場の特徴として際立っているのが、分業と上下関係に見られる階層構造です。日本で知られる「メイド」と「執事」の間には、立場上、大きな

34… Pamela Horn, *FLUNKEYS AND SCULLIONS*, P.275
35… Jessica Gerard, *Country House Life*, P.278

36… *LIFE BELOW STAIRS in the 20th Century*, P.14
37… *FLUNKEYS AND SCULLIONS*, P.277-278
38… Malcolm Airs, *The Twentieth Century Great House*, P.27

相違がありました。実際に手を動かして掃除を行ったハウスマイドや料理を作ったキッチンメイドと異なり、英国執事に求められた役割は部下の統率でした。

『執事に手を動かす仕事はありません。男性使用人を監督するのが仕事であり、部下のすべての仕事は、執事のために行われます』³⁹

現場で手を動かすのは部下に任せ、業務の責任者となったのが上級使用人 (upper servant) と呼ばれる職種でした。上級使用人の執事は屋敷内で働く男性使用人を管理し、同じくハウスキーパーはメイドを監督しました。上級使用人の命令を受ける部下となったのは、下級使用人 (lower servant) でした。

上下の区分が存在した組織の中で、使用人たちは効率的に仕事を進めました。組織は軍隊のような階層構造をしており、誰がどの仕事に責任を持ち、誰が誰の指示に従うのかは屋敷の中では細かく定められました。上級・下級の違いは使用人としての責任・権限 (それに付随する待遇) の差を意味しました。

上級使用人はエリートといえる立場で、裕福な屋敷にその姿が見られました。使用人をわずかしか雇えない屋敷では女主人が直接、使用人を監督する責務を負いました。

必要な知識を得るため、女主人は当時刊行された使用人の業務を定めたマニュアル本を活用しました。1860年代の刊行以降、バイブルとなった『Mrs Beeton's』も、中流階級のミセス・ビートンが、同じ立場にある女性向けに作った家事運営マニュアルでした。

主人の代理人たる上級使用人

上級使用人たちは現場を効率的に動かす司令部として機能しました。多くの部署が協力しあって、スケジュールに基づいた屋敷の運営を行いました。

多くの裕福な人々は、自分自身の手で家の雑務をしたり、教育や子育てをしたりせず、使用人に任せました。大勢のスタッフを抱える屋敷では主人が使用人全員に命令を下して監督することが難しく、上級使用人に管理を委ねるのが一般的でした。

アメリカのメジャーリーグにたとえるとわかりやすいかもしれません。球団には「オーナー」(所有者・出資者) がいます。オーナーはチーム優勝実現のために、ジェネラルマネージャー (GM) を雇います。チーム編成権を与えられたGMは、限られた予算から選手を集め、監督を起用します。監督は集められた選手を管理し、現場を指揮します。

上級使用人の立場は現場を任されたGMや監督に近いものでした。執事Ernest Kingと億万長者のMr Hillの面接風景は、チーム再建を託している様子を想起させます。

『滞在するホテルへ訪ねた私に、Mr Hill は言いました。

「ああ、King。また君に会えて嬉しいよ。いつも、また君に私のために働いて欲しいと思っていた。スタッフの間には揉め事や言い争いが多いんだ。規律が足りないんだよ。混乱を収めてくれないだろうか？ 君ならうまくできるんじゃないかい？ 私は屋敷の中を平和で静かにしたいんだ。そうでなければ屋敷から出てホテルに住むことになる」ベストを尽くすと応えると、翌日から、私は彼の執事になりました』⁴⁰

下級使用人を管理する上級使用人は与えられた様々な権限を行使し、仕事に主体的に取り組める余地を持っていました。彼らは主人の代理人として、主人に提案したり、無茶な要望には反対意見を述べたりできました。

下積み時代の下級使用人

下級使用人にとって、直接の上司は上級使用人でした。主人の世話を直接行う使用人を除けば、主人の姿を見ないまま、あるいは主人と一度も会話することなく、職場を去る使用人は珍しくありませんでした。

『1927年、Margaret Parryは14歳半で家を出て、勤めを始めました。Bathに近い屋敷の4番目のハウスマイドとして。彼女は著者への手紙の中で往時を振り返り、主人たちが使用人を「人間」として意識していなかったことを、奇妙なことだと書いています。

「私たちはある時期、何年もの間、同じ屋敷に住んでいたのに、彼らは私たち使用人について何も知らなかったのです。ただ、私たちが正直で働き者であることを除いては。それすらも、私たちの前の職場の主人たちがくれた紹介状によるものでした。主家の誰かが、私たちの故郷や家族について尋ねたことなど、まったく思い出せません』⁴¹

下級使用人は上司の上級使用人から担当する領域の指示だけを受け、基本的に兼

務をしませんでした。ハウスマイドはキッチンで料理をしませんし、キッチンメイドが主人の部屋を掃除することはありません。

担当領域内では細かく職位が決められ、仕事内容と待遇が異なりました。たとえば3人のハウスマイドが働く屋敷では上から順番にヘッド(ファースト)・ハウスマイド、セカンド・ハウスマイド、サード・ハウスマイドと名づけられ、上位ほど良い待遇を得ました。下位の使用人は低い給与で、多くの雑用を任される大変な立場でした。

下級使用人は上級使用人以上の待遇を得られなかったため、より良い待遇を得るためには、上級使用人を目指さなければなりません。しかし、上位の使用人のポストほど求人が少なく、求められる経験やスキルの高水準が高く、狭き門となりました。

上級使用人の仕事

上級使用人は屋敷の運営に必要な権限を与えられていました。上級使用人に共通する仕事内容について見ていきましょう。

屋敷の監督者

上級使用人は下級使用人を動かしました。下級使用人に仕事を命じ、結果を出させるために「業務分掌の定義」(何をさせるか)、「人員の把握と調整」(定義と実際の調整)、「部下の業務マネジメント」(結果の管理)、「運営・監督」(実際に動かす)、そして「採用・解雇」(メンバーの再編成)を行いました。

執事が監督した使用人は、「屋敷内で働く男性使用人」です。アンダー・バトラーやフットマン、そしてホール・ボーイなど見習い少年たち、そしてオッドマン(雑用係)が、執事の部下でした。

同様に、ハウスマイドやスティールルームメイド、パーラーメイドなど屋敷の中で働く女性スタッフをハウスキーパーが、料理を担当するキッチンメイドやスカラーメイドをコックが監督しました。

業務分掌の定義

上級使用人は業務分掌(担当者ごとに業務を割り振る)を定めました。業務分掌は責任の明確化、業務の効率化に繋がり、使用人に働きやすさをもたらしました。業務を割り振るため、屋敷内の仕事を正確に把握することが求められました。

ハウスマイドやキッチンメイド、フットマンなどの下級使用人は、どの職位にあるかで大きく仕事は異なりました。当時刊行されていた使用人の業務を定めたマニュアルが参考となりましたが、屋敷の規模や人数の違いなど個別の環境による調整が必要でした。ハウスマイドが5人いる屋敷と、ひとりしかいない屋敷では求める仕事は違いました。

業務分掌がしっかり定まっていないと、離職を招きました。

『私に居心地の悪さを引き起こしたのは、私の雇用主でもなく、執事の Mr Brooker でもありません。執事は親切ないい人でした。原因は、ハウスキーパーでした。ここでの私の職務は曖昧で、何かひとつの仕事を始めるとすぐに呼び出されて、別の仕事をさせられるのでした。こんなポジションでは、何かをうまくやっていくことは不可能でした』⁴²

執事となった George Washington は見習い時代の職場で苦勞し、離職しました。彼の職場のように複数の上司を持つ境遇も、働きにくい一因となりました。

人員の把握と調整

上級使用人は業務をスタッフへ割り振り、遂行させました。今いるメンバーにその役割を果たす力が足りない、あるいは、今いるメンバーで実現できない場合(怪我をしたり、病気で倒れたり、辞めてしまったり)に再調整するのも上級使用人の仕事となりました。

当初与えた役割と実際に行っている役割に不一致が生じると、部下の不満を招き、離職に繋がりました。執事 Charles Cooper はフットマン時代に、欠員補充をしないという執事の判断のおかげで仕事量が増大し、大変な目に遭いました。

『私の同僚のフットマンがハウスマイドを殴って解雇された数日後、ファースト・フットマンが身体を壊し、領地へ療養に送られました。この事態で私の仕事はきつくなりました。特に、送迎の仕事すべてひとりではやねばならず、しばしば夜明け近くまで帰れないことがありました。執事は非常に話が分からない男で、私に朝6時の起床を

命じました。私はこれを断りました。7時に起きても、朝食前に求められるすべてを片付けることが、すぐできるようになりました。こんな状態が続けられるわけがなく、私は勤めて3ヵ月で辞めました』⁴³

◆◆◆◆ 部下の業務マネジメント ◆◆◆◆

屋敷の中が十分に機能しているか、仕事が果たされているか、上級使用人はチェックし、部下の仕事の質が悪ければやり直しをさせました。

指示の出し方や命令を遵守させるマネジメントに自覚的な執事もいました。

英国女王エリザベス2世の新婚時代(王女時代)に執事として仕えた経歴を持つ Ernest King はマネジメントの重要性を、こう語ります。

『命令を出して使用人を操ることは、ひとつの技です。つまるところ、今日の工場のように——私は使用人と工場の働き手はほとんど同じだと思います——人事をマネジメントすることは、高い専門性が求められる仕事です。

適切なやり方でマネジメントが行われていれば、誰も命令しているのは誰かなんて気にしません。しかし、そんな天分や能力が誰にでも備わっているわけではないのです。

やり方さえ知っていれば、あらゆる人から最大限の力を引き出す方法も手段もあるのです。でも、それを知らなければ、部下はすぐに怒りだすでしょう』⁴⁴

自分に託された仕事をするため、部下のマネジメントには細心の注意が必要でした。上級使用人は下級使用人がいて初めて、手作業や荒い仕事から解放され、マネジメントを行い、高い給与に見合った仕事を果たせるのです。

◆◆◆◆ 運営・監督 ◆◆◆◆

上級使用人は現場に立ち会って部下の業務を見守り、間違った場合には修正したり、トラブルに対応したりする現場監督としての仕事も行いました。

この能力が最も必要となるのは、ディナーです。ディナーは大勢のゲストを迎え、数多くの料理を提供します。すべてのゲストに、料理を同じ味で同じ温度で提供するには、高いレベルの協調と現場の指揮が不可欠です。取り決めた時刻に料理を提供できるようにコックは時間を厳守し、コックが準備した料理を最高の状態で提供できるよう、現場で料理の上げ下げを仕切ったのが執事でした。

非凡な執事は、時間厳守の遂行を邪魔した「ゲストの遅刻」に毅然とした対応をしました。

『一度ならず、私は1～2名のゲストが不在のまま、ランチやディナーを予定通りに開始させました。「誰と誰がまだ来ていない」と私の雇い主は言いましたが、私が「今始めなければ、ランチ(またはディナー)は駄目になりますよ」と言うと、私の思った通りに運びました』⁴⁵

主人に決断を促すことでコックの仕事は無駄にならずに済みました。

他にも、主人たちが利用する部屋を整えたり、外出しようとしたときにすぐ同行できる準備をしたり、刻一刻と変化する屋敷内で上級使用人は指示を下しました。

「時間厳守」とは、主人たちの快適な生活を運営し、彼らの暮らしを使用人が邪魔しないためのルールでした。

◆◆◆◆ 採用・解雇 ◆◆◆◆

上級使用人(ヴァレットや侍女など部下を持たない使用人やナースなどは除く)は部下の任免権を持ちました。実際に面接をして自分の下で働く部下を選べましたし、契約時に説明した役割を十分に果たせなかった部下を解雇できました。

使用人の採用は大変な仕事でした。だいたい1ヵ月前に使用人は辞職を告げるので、次の人員を早急に見つけなければ、欠員が出たまま屋敷の運営をしなければならなくなります。欠員の補充ができなければ、他の使用人の仕事が増え、それを負担に思えばまた使用人が辞めていく負の連鎖が生じました。採用を急ぐあまりに早期の応募者だけに絞って選考をすると、いい人材を見つけにくくなりました。

一方、解雇は管理手法として有力な武器となりました。その濫用は現場の使用人の労働意欲を削ぎますが、意欲もなく、改善の兆しも主体性も何もない使用人を雇い続けるのは真面目に働いている使用人に悪影響を及ぼしかねませんでした。

解雇は即効性を持ちますが採用の手間もありますし、そもそも採用したのが自分だった場合には、自分の評価を下げることに繋がりかねません。時に、管理者としての資質が問われました。

『もしも主人に反抗的な使用人について報告し、彼らがふさわしくないと主人に報告したとしても、すぐに「お前は、自分の部下たちを管理する方法も知らないのか」と

言われるでしょう。彼らを管理するのが、難しすぎるにもかかわらず、です。

執事は軍隊における上官とは立場が違います。軍隊では上官が兵を束ねますが、そこには権威があり、権限もあります。しかし、執事は己個人の能力でそれを証明しなければならぬのです。そうしなければ、執事がコントロールされる側になります』

46

会計・資材の把握と管理

上級使用人は会計や資材を管理しました。屋敷の管理・維持に必要な資金は、主人より任されました。屋敷によっては、自身の年収を上回る額を一度に扱いました。

◆◆◆◆ 人事に関する資金・賃金 ◆◆◆◆

常駐で働く使用人への給与支払いの他に、臨時で雇う使用人・手伝いへの報酬も管理しました。大きな屋敷の執事ともなれば、常時手元に現金100ポンドを持っていても不思議ではありません。ハウスキーパーも大掃除で洗濯する量が一時的に増える4月には臨時で洗濯の手伝いを雇い入れるのにお金を使いました。

臨時の雇い入れは、上級使用人が有効に使った手段です。使用人が急に辞めた場合、急場をしのぐことができたからです。

領地に囲まれた屋敷ともなれば、手伝いには不足しませんでした。引退した使用人や、使用人の妻、領地に住む人々を、短期契約で雇い入れられたからです。

◆◆◆◆ 業務で必要な資材の調達と支払い ◆◆◆◆

屋敷には蠟燭や灯油、石鹼、インクや紙といった数多くの消耗品や、食料品などの生活必需品がありました。必要な資材が不足しないように上級使用人は手配しました。

たとえばハウスキーパーはハウキヤブラシ、石鹼などハウスメイドが仕事で使う消耗品を業者から買い入れます。ワインなどアルコールの調達は上級使用人の執事に委ねられました。取引先は主に地元の商店でした。

◆◆◆◆ 社交イベントの必要経費 ◆◆◆◆

屋敷は社交の中心、ゲストをもてなす舞台でした。ダンスパーティ、狩猟の催し、領地の住人を集めた園遊会、そしてクリスマスなどのイベントが執り行われました。

ゲストを招いたパーティを開催すると普段よりも食材やワインなどを多量に取り寄せるので、多額の経費がかかりました。

臨時の人手を雇うお金も必要でした。大勢のゲストが来ると、屋敷のスタッフだけで対応できない仕事量になり、給仕のためのウェ이터や、倍増した洗い物を片付ける手伝いを雇いました。さらにダンスパーティを開催する際は、音楽を演奏する楽団さえ手配しました。

あるスポーツイベントの開催を任された執事Eric Horneは主人から全権を与えられて、次のように準備や手配に尽力しました。

『ある時、主人は私の顔の前で楽しそうにこぶしを振りながら「次の2週間、いろいろ大変だぞ。何か足りないものがあつたら承知しないぞ」と言いました。何か不足があつたら私の責任です。私は全権を与えられ、必要なものは何でも注文できたのですから。

屋敷はゲストであふれかえりました。

私は8人のウェ이터を臨時で雇い、男の給仕は15人になりました。そこにゲストのヴァレットもやってきます。この2週間、私は知恵を振り絞って、すべてがうまく運ぶようにしなければならませんでした』47

下級使用人の教育

上級使用人は下級使用人を日々訓練しました。特徴的な指導方法は、下級使用人を上級使用人に仕えさせることでした。上級使用人の部屋掃除や身の回りの世話、食事の給仕は、若い見習いの使用人が行いました。

『私の主人で先生は執事でした。(中略)私が最初に使用人であることを学んだのは、他の使用人たちの使用人になって仕えることからだったと思います。使用人ホールのテーブルを準備し、スタッフ用の食器を磨き、スタッフ用の食事を並べるのです』48

使用人の世話を他の使用人にさせるのは本末転倒で非効率に感じられますが、未熟で若い使用人に仕事に必要なマナーを叩き込み、技術を覚えさせる意味がありました。

教育は、使用人の世界のルールを肌身に感じさせるのにも役立ちました。初めて勤めに出るような未熟な若い子たちに、使用人としてのルールや規律を叩き込むのは骨が折れました。上級使用人は、いわば保護者のように私生活も含めて下級使用人を監督しました。

『上級使用人には大きな責任がありました。上級使用人は屋敷の女主人よりも、若いスタッフに厳しく接しました。女主人だった私が、屋敷のスタッフたちのモラルに関して注意した記憶はありません。執事は男性使用人たち、コックとヘッド・ハウスメイドは若いメイドたちの面倒を見ました。とても若い子たちもいて—— 16歳を下回っているような—— その子たちの賃金はとても少なかったです。彼らの門限は午後10時でした』⁴⁹

上級使用人が上位者として特権を行使して下級使用人を支配したケースもありますが、上級使用人にとって教育は負担にもなりました。下級使用人は上級使用人ほど待遇が良くないので入れ替わりが激しく、同じ指導を何度も繰り返さなければならなかったからです。

上級使用人と下級使用人の大きな溝

屋敷内の階級差に支配される使用人の中でも「上級 (upper) と下級 (lower)」の区別があり、「立場や責任の差」だけではなく、「意識の上での差」も生じ、時に「差」の意識は「主人と使用人」の関係より厳しくなりました。

『「階下のヒエラルキー」の中では、誰もが己の置かれた立場を意識しなければなりません。私はスカラリーメイドからキッチンメイドに昇進しました。それは、侍女がスカラリーメイドに挨拶するより先に、私におはようと挨拶してくれるようになったことを意味します』⁵⁰

これはある女性に対する、他の使用人の態度です。「使用人が主人以上に階級にうる

さい」態度の一端です。

「Upper Ten」と「Lower Five」

上級使用人と下級使用人の間に引かれた線を示す言葉が「Upper Ten」(upper servant)、「Lower Five」(lower servant) です。「Upper Ten」は19世紀の上流階級の人々を指すUpper Ten Thousandに由来し、上級使用人は「階下の上流階級」として君臨しました。

『立場と地位によって、使用人の中での優先順位は決まっていた。使用人は「上級」「下級」に分けられ、上級使用人はUpper Tenと、下級使用人はLower Fiveと呼ばれます。私たちロイヤルフットマン（訳注・王家に仕える公爵付きのフットマン）は王宮のスタッフなので、このどちらにも属しませんでした。現実として公爵家での立場は、「下級」に所属しました。

ふたつのグループは社交上決して交わらず、その間にある境界線は、私たちが仕える主人たちとの間にあるものよりも厳密なものでした』⁵¹

19世紀末にフットマンとして公爵家に仕えたFrederic Gorstは、ふたつの世界の間にある「溝」の雰囲気を読みました。上流階級の女性から見ても、それは目に余るものでした。

『「使用人の中にある、階級への偏見と戦うのは難しい」とLady Willoughby de Brokeは嘆き、「上級使用人は、たとえ親類や友人でも下級使用人とは交わらうとしない」と述べました』⁵²

屋敷では下級使用人ほど大変な仕事をしました。成果を出させるには下級使用人を従わせる方法が有効でした。その手段として、権威づけは重視されました。

『執事として、Slingsbyは、下級使用人に対して厳しい父のように振る舞わなければならないと気づきました。（中略）「平等だと思わせるほどに、下級使用人と親しくなってはならない」、あるゲームキーパーはそうアドバイスして、こう続けました。「親切で

礼儀正しくあれ……ただし、決してあなた自身が、上位者であることを忘れてはならない』⁵³

食事の席での会話禁止

「厳しい父」のような振る舞いは、日々の生活の中で、下級使用人に刷り込まれていきました。最も端的なのは、食事の場面です。

『使用人ホールでの食事の規律は厳しく、とても古い流儀で行われました。私たち下級使用人は、上級使用人が入ってくる少なくとも5分以上前に席に着き、彼らが入ってきたら起立の姿勢をしました』⁵⁴

さらに上級使用人が同席する場で、下級使用人は会話を許されていませんでした。

『他の屋敷と同様に、ほとんどの食事の時間は煉獄のような沈黙に支配されていました。私たちメイドは話したり、笑ったりしたくて仕方がなかったのですが、静かにしていなければなりませんでした。

「修道院のような沈黙」を乗り切るため、私はよくEmmaと秘密のサインを交わしていました。私が眉をあげたら、「マーマレードジャムをとってこない?」という合図になりました。ぴくぴくさせたら、彼女の近くにあるケーキが食べたい、というサインです。

夜食の時間には私たちは会話を許されました。だから、私たちはよそから来ている運転手やメイドたちと、ゴシップに興じました』⁵⁵

厳しい規律は受け入れられにくいものでしたが、規律を重んじた執事Ernest Kingは、実際に自らが執事となった立場からか、この習慣を意味のあるものだとしています。

『この環境によって、私たちは規律を叩き込まれました。最初から会話をしていたら、食事の時間は延びてしまっていたでしょう。食事をすませて、すぐ仕事へ戻ることが大切でした。私たちは楽しむために食事をするのではないのです。

私たち下級使用人は、規則どおりに振る舞わなければなりませんでした。従うか、出て行くかしかないので。

私たち使用人は、誰もそのことに腹を立てませんでした。全員がそれを喜んで受け入れていました。私は長い使用人生活の中で、このように考えるようになりました。より良い規律ある職場にいる方が、使用人はより幸せに働くことができ、使用人の世界には大きな調和があるのです。もしも規律が欠けていたら、中傷や嫉妬や、怠惰な環境へと堕してしまうのです』⁵⁶

異なる待遇

上級使用人たちの食事は質が高く、量が多くなりました。上級使用人たちは昼食の途中で退出し、執事かハウスキーパーの部屋で特別な料理・デザートを楽しめました。

『上級使用人には白ワイン、クラレット、それにビールが昼食と夕食のときに出されました。陶器、銀食器、グラスが食事には使われ、それらは執事付きのフットマンが専任で手入れをしました。これらの品々は英国の小さな屋敷のものよりも上質でした。銀のリングに通したナプキンは毎日朝食と昼食で同じものを使いましたが、夕食ではテーブルクロスもナプキンも新しいものに換えられました』⁵⁷

上級使用人は特別扱いされることで、屋敷への帰属意識を高め、仕事により主体的に取り組める環境にありました。

呼び方／呼ばれ方

下級使用人と上級使用人、そして主人の間には、お互いに呼びかけるときの複雑なルールがありました。原則として、下級使用人は主人や上級使用人に自分から話しかけるのは望ましくない、とされていました。

◆◆◆◆ 主人と使用人の間 ◆◆◆◆

下級使用人は、主人たちからクリスチャンネーム(名)で呼ばれました。「Edwin Lee」は「Edwin」、「Emma Jaggard」は「Emma」。これは主人との距離感や親しみを示すものではありません。悪い言い方をすれば、敬意を払われていないのです。

使用人が堪え難い扱いのひとつに、使用人の名前を勝手に呼び変える主人の習慣がありました。覚える手間を省くためや、雇用主と同じ名前を持つ使用人や、実名が「使用人らしくない」という理由でシンプルな名前に呼び変えられました。

たとえばフットマンであれば役職が上から順番に「Frederick」「Charles」「George」と呼ばれ、新しいスタッフが穴を埋めても、同じ名前を使うというような具合です。

『もしもあなたが難しい名をしていたら、たいいてい名を変えられてしまったでしょう。主人たちの多くは使用人それぞれに名を与え、ひとりが辞めたときは後任に同じ名を与えました。もしも、Ramsbotham というような名の使用人がいたら、主人たちはその名を呼ぶことを好まず、多分、彼女のことを Ethel か、何かシンプルなものに呼びかえらるでしょう。私 (Millie Milate) はいつも Mary と呼ばれました。もし Gladys という名のメイドがいて、主人たちが“ふさわしくない”と思ったら、私たちは Any やこれに似た名で呼びました』⁵⁸

使用人から主人に話しかけることは無作法とされました。以下、当時の使用人と主人の間にあったルールの抜粋です。⁵⁹

『命令を受けたり叱責を受けたときはいつでも、「はい、奥様」とか「申し訳ございません、奥様」のように返事をして、言いつけを聞いたことを示すこと』

『どんな場合でも、「Ma' am」「Miss」「Sir」をつけずに紳士淑女に話しかけてはいけません。また、紳士淑女やそのお友だちに話しかけたり、そのお住まいのことを言うときに、「グリーン」のとか「ターナー」のなどとは言わず、「Mr」や「Mrs」など名前の前にふさわしい敬称を必ずつけて「…様の」と言うこと』

『主家のお子さん方のことを言うときにはいつでも、「Master」とか「Miss」のように敬称をつけて言うこと』

『目の前で面白い話が交わされていても、笑ってはなりません。あるいはどういう形であれ、主家の会話や食卓での会話、お客様との話などに関心をもっているように見えたり、割り込んだりしてはなりません。そしてまた、頼まれてもいないのに何事かを伝えたりしてはなりません。そうしなくてはならないときは、できるだけ短い言葉ですませなさい。それでももし、食卓やお客様の前で、頼まれなくてもどうしても何事かを伝えなければならないときは、静かに主人や女主人に伝えなさい』

一方、執事やハウスキーパーなどの上級使用人は「敬称+姓」で呼ばれました。執事は「Mr」(Edwin LeeはMr Lee)、ハウスキーパーやコックは結婚していなくても、「Mrs」と敬称をつけました (Emma JaggardはMrs Jaggard)。MrsではなくMissと呼ぶ屋敷もありましたので、この辺は主人の方針次第でした。

◆◆◆ 上級使用人と下級使用人の間 ◆◆◆

上級使用人が下級使用人の頭上に君臨した様子は、呼びかけ方に見られます。

『執事には“Sir”と、ハウスキーパーには“Madam”と敬称をつけ、他のスタッフは話しかけられた場合のみ返事をするのです。このルールは、主人と接するときもまったく同じです。

その Mr Bentinck の経験——「私が使用人として勤めたお屋敷の日々での」——は、一般的な習慣です。若い使用人は常に上位者に“Sir”か“Madam”をつけて呼びかけなければなりませんでした』⁶⁰

主人と上級使用人への、下級使用人のとるべき態度はまったく同じでした。返事は短く、言われたとおりにすぐ行動する。呼び方ひとつとっても、日々下級使用人は上級使用人への従属を意識づけられました。

終わりに

この章では中世の貴族と屋敷を起点に、ヴィクトリア朝に最盛期を迎えた使用人の歴史を扱いました。国の統一と帝国主義の形成、そして産業革命を経て英国が発展を遂げて中流階級が増大していく過程で家事使用人の雇用は普及しました。

繁栄する大英帝国の中、社会を動かした「上流階級・中流階級」と、大多数の「労働者階級」とは大きく「2つの国民」として隔てられましたが、後者に属した使用人は上流階級や中流階級の人々の家庭に住み込み、仕事を通じて彼らの生活を支える不可欠の存在となりました。

キャリアアップの機会を探したり、最低限の保障を得たりするため働いた使用人の待

遇は、雇用主の経済力で千差万別でしたが、スタッフが大勢いる裕福な屋敷に代表される職場は、狭き門とはいえ、決して閉ざされたものではありませんでした。

生まれつきの身分では決まらない使用人の世界では、多くの努力と少なからぬ運があれば、下級使用人から上級使用人へとステップアップできました。そして、道具のように扱われた使用人もいた中で、上級使用人は居心地の良い屋敷には長期間勤務し、その献身が愛され、仕事では尊敬を受けられる機会に恵まれました。

『執事やハウスキーパー、ヴァレットに侍女たちは、ずいぶん長い間、私たちと一緒にいました。彼らは私たちの最も偉大な友人たちです。私と兄は、屋敷に私たちにかいないときには、午後6時半にハウスキーパーの部屋へシェリー酒のグラスを持って訪ねました。そこで私たちは屋敷で何が起きているのかを知ることができました』

61

屋敷Fleteで上級使用人との時間を過ごした、Mildmay男爵令嬢Helenの言葉です。上級使用人は家族の傍におり、時にそれは何世代にもわたりました。

上級使用人は仕事に誇りを持ち、主体的に動き、努力に見合った待遇を得る機会に巡りあえました。その代表として、侍女だったRose Harrisonは同僚の執事Edwin Leeを高く評価しました。

『Mr Leeの流儀はとっても印象的でした。女主人のLady Astorは偉大な社交の主宰者と見なされていましたが、彼女自身は決して素晴らしい計画者ではなく、文句を言ったり、邪魔ばかりをする人でした。もしも彼が素晴らしいまとめ役で、また交渉事に外交手腕がある人物でなかったら、Lady Astorの社交界での名声は、一夜にして消え失せてでしょう』

62

屋敷を運営する責任者となった上級使用人は、貴族の名声を築く「パートナー」となれました。優秀な上級使用人とスタッフは、贅沢な暮らしを営み、社交界でゲストを招く貴族や上流階級の人々には不可欠でした。

19世紀末から20世紀前半にかけて、使用人を巡る社会環境は大きく変わりましたが、ヴィクトリア朝に形を整えた使用人の世界は、多少姿を変えつつも、約1世紀の間、続きました。